

あ と が き

蒜山酪農地域形成の全貌を明らかにするため、「まえがき」に示した6項目に関しては第1章から第7章に分けて記述した。

すなわち、蒜山酪農地域形成の動機付けとなった行政主導型ジャージー種牛の集団的導入事業については第1章と第2章第1～2節において記述している。その中でわが国および岡山県における戦後期の酪農振興政策、そして岡山県における酪農処女地・蒜山地域への乳牛導入の基本計画と周到な事業実施計画、地元町村における乳牛受入れ態勢と乳牛導入予定農家の準備状況などについて詳細に記述した。

蒜山酪農地域の形成過程について第2章第3～7節において記述した。その主たる内容は昭和39年（1964）以降の酪農近代化期における蒜山地域構成4か町村間にみられる酪農地域形成力の差異、昭和40年（1965）以降におけるジャージー種牛とホルスタイン種牛の共存、酪農業の農業総生産額に占める地位、美作集約酪農地帯におけるジャージー種牛導入地区の明暗と蒜山地域酪農の特質、全国ジャージー種牛集約酪農指定12地区における蒜山地域の位置づけ等である。

個別酪農経営の展開について第3～5章に亘って記述した。先ず、第3章では乳牛飼養規模の拡大、酪農経営組織および酪農生産技術の展開過程、酪農経営規模拡大の検証が取り上げられ、第4章では個別酪農経営の経済的成果、第5章では個別酪農経営の生産技術水準について時系列比較を行った。

草地改良事業について第6章で記述した。そこでは蒜山地域における大規模草地改良事業を含む全ての草地改良事業の実績、蒜山盆地を囲む蒜山山麓と中国山脈山麓における大規模草地改良事業により造成された公共草地と酪農経営展開の関係、公共草地における放牧経営の事例（百合原牧場、八束村公共育成牧場、蒜山酪農協乳牛育成牧場）などについて記述した。

蒜山酪農農業協同組合の酪農地域形成への貢献について第7章において記述した。同章では蒜山酪農協の誕生、組合の輪郭、組合事業の理念、事業推進のための施設設置状況、生乳の市乳及び乳製品の製造・販売、酪農生産における指導・奨励事業、消費者との交流事業、組合事業の損益、朝日農業賞の受賞の経緯、そして組合の酪農地域形成への貢献について記述した。

教育・試験研究機関の酪農業への貢献について第1章第2節と第9章において記述した。第1章第2節では岡山県における酪農に関する教育及び試験研究は酪農振興政策の一環として位置づけられ、両者機関が整備された経緯を記述し、第9章第1～8節においては岡山県立酪農大学校、その後身である財団法人中国四国酪農大学校における教育体系（目標、教育方式、授業科目）、教育施設、付属牧場の経営、海外交流、酪農ヘルパー支援、大学校の運営経費、酪農地域形成への貢献について記述した。また、第9章第9節では酪農関係試験研究機関の変遷、酪農に関する試験研究内容、試験研究機関の蒜山地域酪農への貢献と今後の課題について記述した。

上述した6項目の中で、酪農経営の展開過程は多数の酪農家からの聞き取り資料に基づき記述したものである。その聞き取り調査は数年間に亘って行われたが、現在の経営主は2代目であるにもかかわらず、初代当時の記憶を辿りながら、その資料提供に積極的な協力を惜しまれなかったのである。

個別酪農経営の経済的成果と生産技術水準に関する内容は、岡山県畜産協会が所蔵する酪農経営診断関係資料に基づくもので、同協会はその資料の活用について快諾されたのである。なお、乳牛の病傷事故発生に関する資料は真庭農業共済事務組合、そして乳用牛群能力検定成績資料は岡山県真庭家畜保健衛生所および岡山県総合畜産センターの好意により入手することができたのである。

草地改良事業について岡山県畜産課、同県真庭地方振興局畜産係および蒜山地域4か町役場から資料の提供を受け、大規模草地改良事業による公共草地のうち、百合原牧場と八束村公共育成牧場について前者は当時の経営者、後者は八束村農業協同組合職員から資料の提供を頂く幸運に恵まれたのである。

蒜山酪農農業協同組合と組合営乳牛育成牧場（公共草地利用）に関する記述は同組合業務報告書によるが、同報告書に不記載の資料収集には担当職員及びおこやま酪農農業協同組合担当職員の積極的な協力を頂いたのである。また、真庭郡内の乳牛飼養頭数に関する統計資料は岡山県真庭家畜保健衛生所の提供によるものである。

中国四国酪農大学校に関する記述は同校教務課からの聞き取りと所蔵の資料に基づくもので、それらの便宜供与について快諾されたのである。岡山県総合畜産センターにおける研究業績の記述は、同センター研究報告および岡山県酪農試験場研究報告によるが、その中で一部の資料は関係者からの提供によるものである。

以上のように資料収集等にご協力を頂いた方々は多数に及んでおり、ここではお名前を省かせて頂き、皆様に対し心から感謝の意を表す次第である。

なお前後するが、本書では特に第8章において、蒜山酪農農業協同組合の今後の取り組み（役割）について言及した。その背景は本文で記述したように、蒜山酪農地域形成の端緒は岡山県の行政的誘導という外発的なものであったが、今日におけるジャージー種牛乳のブランド化を目指した酪農地域形成の成果は、昭和40年（1965）代以降における同組合の内発的発展のための積極的な組合活動、すなわち地域酪農の六次産業化事業の帰結であると言っても過言ではない。それゆえに蒜山酪農協は、平成5年（1993）2月に「朝日農業賞」（朝日新聞社）受賞の栄光に浴したのである。

しかし、日は昇り、そして日は沈む天体の現象に似て、蒜山酪農協は光り輝く「明」の時代を築き、平成10年（1998）頃から「暗」の時代に遭遇している。それは乳業・消費市場の停滞的状況という外部条件等が加担した、地域酪農六次産業化事業の推進に立ちはだかる悩ましい様々な問題との出会いによるものである。そして、その苦境から脱出するためには、長期的な展望に立った対応が早急に求められている。

その難題の解決は組合自身に帰属する事柄であると同時に組合員自身の問題でもある。一方、それは地域の行政機関、農林業者、商工業者、観光関係業者、関係諸団体、地域住民、さらには都市住民等との密接な協働関係（パートナーシップ）を構築したうえで取り組むべき、地域酪農レベルを超えた地域社会の問題である。

以上の背景を踏まえて、本書では特に第8章として「美しい農村の創生に向けた蒜山酪農協の課題」を設定し、上述の悩ましい問題の発生した原因を詳述し、その解決への方途を記述したのである。

この章で提起した「美しい農村」とは、蒜山盆地の「美しい高原の自然環境」を守り、「森林と草原と田園の文化的景観」を形成し、「豊かで快適な生活環境」を創出し、それら3条件の総合化によ

て創生される「新しい地域文化」を絶えず育む農村を意味する。そして、その「新しい地域文化」創生のためには地域総ぐるみの取り組みが必要であり、蒜山酪農協はその一翼を担い、しかも先導的に行動を起こす立場に置かれている。

同章では蒜山酪農協が担う課題に対する解決策のひとつの道筋について、その根拠となる背景を解説的に述べている。それは個々の道筋が国レベルにおける農林業や環境等の諸政策、さらに国際的な時代の流れに沿った必然性を宿したものであるからである。

願わくば「美しい農村の創生に向けた蒜山酪農協の課題」で記述した内容が、組合職員と組合員に理解され、共通認識となり、組合が一丸となってその課題の解決に向かい、粘り強く行動するための学習材料として活用されることを切に望む次第である。そしてまた、「新しい地域文化」の創生のために立ち上がる地域の人々の、蒜山酪農協への支援に役立つならば望外の喜びである。

筆を擱くにあたり、昭和20年代末期、岡山県畜産課長として酪農処女地・蒜山地域に熱い眼差しを注ぎ、地域産業振興の先駆けとして酪農地域形成の礎石を築き、その後県立酪農大学初代校長として酪農教育に渾身の力を振われ、志半ばで逝去された惣津律士先生の霊前に本書を捧げたい。

最後に、この本の刊行を快くお引受け下さった岡山県畜産協会に対し心から感謝の意を表したい。

三秋 尚